

2024 年度前期 START プログラム 事後レポート

所属学部・学科・学年	総合科学部・総合科学科・1年
------------	----------------

(1) START プログラムに参加して何を学んだか、この経験を今後どのように活かしていきたいか

中国に行って現地の人々と交流したり歴史を学んだりした経験について振り返ると、国同士の歴史認識や政治上の国際関係に関わらず、人々は良好な関係を結ぶことが可能であるということが分かった。中国と日本は歴史・政治などの側面から長い間確執があり、渡航直前には残念な事件もあり、現在でも互いの国や国民にあまり良いイメージを持っていない人も少なからずいるだろう。しかし、いざ行ってみると、国籍に関係なく人々はあたたかく、非常に良くしてもらったと思うので、人々の認識の中には誤解や偏見もあるのだと感じた。自分は在学中にいずれ中長期の留学に行く予定であるが、その際どこの国に行くとしても、周りの不確かな情報に振り回されないように開かれた心をもって行きたい。また、私は総合科学部でまだ専攻を確定してはいないが、もともと歴史に興味があった中でアジアの歴史や国際関係、人々の歴史認識についても START プログラムがきっかけで興味が出てきたので、今後の自分自身の進路や学びの参考にしたい。

また、長春大学でのプログラムで特別教育について学んだりその学生たちと交流をしたりでき、多様な背景を持った学生たちが芸術・技術・スポーツなどの分野の様々な技術を身につけて社会の一員として重要な役目を果たせるような進んだ教育がされていることに感銘を受けた。これこそ「ダイバーシティとインクルージョン」の一種だと思った。私には特別支援学校にずっと通っていた小学生時代からの友人がいるが、その子や家族から聞く話から判断すると、日本ではディスアドバンテージを持った人々が社会の一員として活躍できる環境が必ずしも整っているわけではないというようなイメージがある。今後自分が何かの役に立つことができるかどうかは分からないが、この貴重な経験をもとに方法を模索し続けていきたいと思う。

そして、言語について、私は今ベーシックとインテンシブの中国語の授業を取っているが、現地の先生方や学生、お店の店員さんたちとの意思疎通の中で、自分の中国語が非常に初歩的で全く生かすことができなかつたことは少し残念に思った。もちろん最初から通じるとは思っていなかったが、中途半端な語学力では本当に厳しいということが分かった。英語がなかなか通じない学生さんたちとコミュニケーションを取る際、もっと中国語の知識があればお互いさらに楽しめたららうに、と想像以上のもどかしい思いを感じた。だが、その経験のおかげで語学学習へのモチベーションが高まったので、今後も中国語、そしてもちろん英語の学習にも全力で取り組んでいきたい。

(2) プログラム内容についての全体的な感想

中国は日本と地理的にも近く、歴史・文化的にも深いつながりがあった国なので、馴染みやすいのではないかと思いながら参加したが、いくら近い国だからと言ってもカルチャーショックは大きかった。特にショックが大きかったものは食事とトイレで、慣れるまでは大変だったが、後半の期間は少しずつだが慣れてきて特に食事は楽しめるようになってきたと思う。また、カルチャーショックはマイナスな側面についてだけではなく。例えば、支払いの方法がほとんどキャッシュレスだったのは流れがスムーズで非常に便利だった。こういったカルチャーショックにも対応するための適応力が、海外留学や旅行をするには不可欠であると思った。

プログラムについて、日中の講義や体験学習、施設の見学などで、普段あまり学ぶ機会のない他国の文化・歴史や特別教育システムについて触れることができたことはとても貴重な経験だったと思う。東アジアの歴史や文化についての興味を持つきっかけにもなったので、自分の専攻を決定する前の大学生の早い段階で行く決断をしてよかったと感じている。授業以外の自由時間にも、ショッピングモールや屋台街などに行き食文化や街や買い物の様子を実際に体験できたことで、異文化を肌で感じることができ、自分の視野を広げることができたので非常に良かった。日本では想像もできないような施設や食べ物、習慣などを日々吸収して、価値観のアップデートをし続けることができたというのは、海外初体験であった私にとって新鮮かつ貴重な体験だった。

そして何より、とても楽しい、良い思い出になった。プログラムのメンバーの中には私が元々仲良くしていた人がいたわけではなく、最初は心細くて不安だったのだが、プログラムを通して日本の学生とも外国籍の学生とも仲良くなって、気が付けば心から楽しみながら体験ができるようになっていた。自分が経験した楽しかった思い出はしっかりと心に留め、この縁を大切にしていきたいと思う。

(3) 今後 START プログラムに参加する後輩へのアドバイス

私は英語だけでなく中国語の実践の機会も得たいと思って中国に行くことを選択したが、インテンシブまで授業を取っている、もしくは過去に取っていたとしても、いざ現地の方が現地語で話しているのを聞き取ろうとしても全く歯が立たない。簡単な単語がところどころ聞き取れるくらいだし、自分から話すにしても想定していたことや簡単な文と単語しか出てこない。しかし、自分の現地語のレベルを認識するにはとてもいい機会です。今後の語学学習のモチベーションにもつながるため、積極的に挑戦してみたいと思う。さらに実践の機会を得たい場合は、簡単な日常会話文や使える単語をもっと調べて、覚えてから行くべきであると思う。現地の方にはあまり英語が通じないので、中国語を全く習っていないとか苦手である場合にはさらに困難な状況に遭うかもしれないが、いざというときにはスマートフォンの翻訳機能も役に立つので、怖がらずにコミュニケーションを取ってみるべきだと感じた。

元々仲がいい人が一緒に行くメンバーの中にいなくても、一緒に過ごすうちに日本の学生とも海外の学生とも学年を問わず仲良くなって楽しめるので、ひとりでも思い切って START プログラムに挑戦してみたいと思う。

私も海外渡航が初めてだったので不安だったが、初渡航が先生や他の学生と一緒にという点で安心感を得られるし、自分一人では調べきれなかった様々な情報も入手できたので、やはり海外経験が無い人こそ START プログラムはぴったりだと感じた。

2024 年度前期 START プログラム 事後レポート

所属学部・学科・学年	総合科学部・総合科学科・2年
------------	----------------

(1) START プログラムに参加して何を学んだか、この経験を今後どのように活かしていきたいか

私が START プログラムに応募した理由は主に 3 つあった。特別教育の学びを通して教職課程の履修における視野を広げること、中国の歴史を知り将来の進路選択の参考にすること、そして中国に対して持っていたステレオタイプの払拭と異文化理解を促進すること。これら 3 つの点を踏まえながら私の学びを振り返っていこうと思う。

今回のプログラムの中で私が最も苦労したのは、障がいを持った方とのコミュニケーションだった。耳が聞こえない方との交流には中国語も英語も使えず、ジェスチャーで試したが意思疎通が捗らなかった。先生方が手話を通して交流していたのを見て、私は中国に来るにあたり少し中国語を覚えていったものの、手話というコミュニケーション手段を想定・準備していなかったことに気付いた。言語は口だけでなく手を通じて通じるということを身を持って感じた。これまで障がいを持った方と交流する機会があまりなかった私にとって、彼らの生活やコミュニケーションに具体的な想像ができていなかった。また、目が見えない人との交流においては、声を掛けても自分の中国語や英語がうまく伝わらず気まずい雰囲気になったり、相手に直接触れてトントンするように身体全体に伝達して良いのか、距離感にとっても迷った。どのように自分の意見を伝えればいいのか、発音がきれいではない中国語や英語に「何を言っているのか分からない」と言われ初めての経験に困惑もした。しかし、言葉はあまり通じなかったけれど、笑顔でダンスをしたり、歌を歌ったり、楽しそうに卓球やバドミントンをしたり、私の拙い芸術センスを包み込むようにはるかに上手な絵を描いてもらったり、心の繋がりを通して、彼らはただ障がいがあるだけで、様々な才能や豊かな感性を持って活動をしていることを知った。最初の授業で劉先生に「私たちも腰が痛かったり、心臓が悪かったり、どこかしら障がいを持っているのだ」というニュアンスのことを言われた。これまで関わる機会がなく、知らなかったからこそ、「障がい」という言葉に一方的に「支援」という言葉を結び付けて、私たちの生活にないものとして区別してしまっていたかもしれないと思った。彼らは私たちがどこか不調をきたした時と同様に「ただ障がいがある、それだけなのだ」という新しい感覚を身につけることができた。偶で指折りする人を見ながら踊る視覚障がいの学生、先生と一緒に休憩を取りながら卓球を楽しむ麻痺を持った学生。私たちは彼らに一方的にサポートを与えているのではなく、彼らを見てみると、相互的に彼らから感動や笑顔をもらっていることに気づいた。私もこれから生活や人生の場面で障がいを持った方と関わる機会が

あると思うが、今回身について感覚やツールとしての手話を持って一緒に成長できるサポートを創造する社会規範を持ちたいと思った。

この旅で少し怖かったことがある。それは、現在においても「反日感情」と表現されるような中国、特に吉林地域においては満州を通じて日本が行ってきた歴史に関することだった。出発前、Teams でドキッとする通知が届いた。それは「918 事件」に関するもので、日本では「満州事変」と学校教育で学習するものである。中国においては、9 月 18 日を始めた 9 月は平素に比べて日本や日中関係に対して関心が集まりやすい時期で、現地での日本人の不必要な言動は控えるようにとのことだった。中国で現地の学生にキャンパス内を案内してもらっている時、不意に戦争の話題を振られた。彼から「日本人は先の中国との戦争についてどのように考えているのか」と聞かれた。気まずい時間が流れ、私は問いかけに答えることができなかった。なぜなら、満州を通じた日本についてあまり考えたことがなかったからだ。おそらく私と同じ態様になる日本人はいるのではないかと思う。「満州」と言われても、今の私たちの世代にはもう馴染みのない「歴史」上の出来事で、暗記用語のようになってしまっているのではないか。彼に、「この後の日程の偽満皇宮博物館では特に日本人としての態度を考えた方が良い」と付け加えられた時には、少し背筋が凍るような思いもした。日本では、第二次世界大戦における原爆がスポットを浴びて、戦争の被害者としての側面が強く印象づいている気がしている。日本の加害者としての側面がどうしても薄くなり、無意識な態度や発言をしている部分が私にもあったかもしれないと見つめ直した。そのやり取りを受けて初めて、歴史はただの過去の暗記ではなく、2 世、3 世となっても残り続けるその地の人々の苦しみや怒り、現地の教育が伝える惨状に、加害国側の人間としても正しい知識と考えを持って現代のお互いの理解へとつなげていくものなのだと気づいた。そして、地理歴史の教職課程を履修している者として、歴史を学ぶ意義はそこにあるのだと思った。自国の視点からだけでなく、他国の視点からも自分なりに考察・検証すること、日本や日本の歴史を見るという考え方は今後の学びの中で積極的に取り入れていきたい。

このプログラムの中で最高の中国の友達(刘君)ができた。最後の学びは「出会い」を通じたステレオタイプの払拭と異文化理解の促進だ。報道や SNS を通して受ける中国のイメージは少し固いものだった。揺れ動く国際情勢の中で貿易・軍事・政治など様々な側面で緊張感も存在する中、どこか「中国」という言葉に押し込んで、自然とイメージをつくり上げていた部分があった。このプログラムを通して刘君を始め、現地の中国人大学生、北京やタイからの大学生、先生方と交流することができた。日本にいたら、普通の道に便器が落ちていることなど考えられないだろう。生きた蚕の幼虫が道端で平気に売られていることを誰が想像するだろう。「Hey,日本人」と話しけながら謎の木の実を渡してくるお兄さんや、下道を 100 km オーバー&急ブレーキ連発で運転する 5 元の激安タクシーはフィクションの世界なのではないか。一つ一つの驚きを経験する中で、不意に感じたことがある。もし、私がこの旅を一人で来ていたら、一人で道端の便器を見ていたら、果たして目の前に広がる光景を自然と受け入れることができただろうか。好奇心が上

回る自信が即座には湧かなかった。私をその世界に飛び込ませて「これも『文化』なのだ」と納得させてくれたのは、やはり仲良くなった中国の友達がいたからなのではないかと思う。「こーれが普通だよ～」 「めっちゃおいしいよ。」とやって紹介してくれた、あまりおいしくない食べ物も、普段彼が食べていると聞くだけで親近感が湧いてチャレンジできた。見慣れない光景に少し抵抗があった大学での軍事訓練も、必修で実弾の試験もやったということを聞くと、見える景色がより身近になっていた。

「離れていても心は近い。」

最後の別れの時に、半泣きになりながら見つめる私に向けて刘君が言ってくれた言葉だ。この START プログラムを通して「出会い」について考えることが多かった。大学生になり、授業・アルバイト・サークル・課外プログラム等を通して活動の幅が広がるにつれ、接する人の数も増え、生活に追われて出会いについて反芻する日があまりなかったように感じる。自分の考え方、関心、感動、内側からの感情を湧出して変えてくれる最も基本的なものは、人と人とのつながりなのだと感じた。友達でも好きな人でも家族でも、自分にとって大切な人の文化、慣習、その人が生きてきた環境を否定したくはない。例えばそれが自分のバックグラウンドと異なり、すぐに受け入れることができないものだとしても、最大限の理解をする努力をするだろう。A君は私にとって海外でこんなにも仲良くなった初めての友達だ。一人の存在がこんなにも中国というイメージに対して変化を与えてくれることを知った。現代の世界はとても複雑で、先に述べたように緊張感も日中間でさえ否めない部分はある。そのなかで生まれてくる相手への先入観や偏見は、お互いにとって決して関係の構築や理解の方向へは導かない。私のような広島大学で学ぶ 1 大学生でも、長春での偶然のような出会いを通して築いたネットワークが、まずは私から、そして周りの人たちへ相互理解を広げていけるものだと強く確信をもつようになった。この出会いが必然だったと言えるように、交流を絶やさないように大切に育んでいきたい。

(2) プログラム内容についての全体的な感想

まず、START プログラムを通して大変貴重な経験と学びの機会を提供して下さった殷先生、石井さん、崔先生、刘先生を始め、長春大学・北京師範大学・カセサート大学・広島大学のメンバー、関わって下さった全ての方に感謝いたします。ありがとうございました。

長春から帰国し、関西空港に着いたときに、日本に無事に着いた安心感よりも長春への寂しさの方が上回っていた。「また行きたい、戻りたい」という思いの方が強かった。私は旅行好きで一人でも日本中を移動したり、数は少ないものの大学生になってからは海外にもチャレンジしている。しかし、ほとんどの場合、日程の途中で早く帰ってゆっくりしたいなと感じる瞬間があった。START プログラムを通して、もっと長春にいたい、と帰国が嫌になる感情を持ったのは初めての経験だった。

日程最終日のプレゼンで私は「記憶」と「思い出」の違いについて述べた。机の上で学ぶこと、相手の国の文化や慣習・言語は、相手を理解する上でのベースにはなるとは思う。しかし、その「記憶」は時流とともにかすみ忘却していくものだと思う。逆に実際に見て、聞いて、話して得た「思い出」は一生心の中に残り続けるものだと思う。

プログラムの中で私は2度、刘君に叱られた。1度目は、写真を撮ろうとして膝をつこうとした時だ。急に駆け寄ってきて立たせてきた。後で彼に理由を聞くと、「男の膝下には黄金がある」という考え方を教えてくれた。そのため膝をつくのは良くないということだった。2度目は将来の話をした際に私が「自分には目立った才能がないから…」とつぶやいた時だ。彼に「そんなことを言っってはいけない。今はないかもしれないけれど、平さんは一生懸命勉強して才能をつけていっているんだよ」と励ましてくれた。中国人は自信を持っている人が多いと聞いたことがあったが、非常にポジティブな考え方とそれを周りに分け与える刘君の考え方にはとても惹かれた。やはり、自ら五感で吸収して得たものは、感覚として残るし、「百聞は一見に如かず」というように新しい学びに寛容になるなと感じた。机上の学びももちろん大切だ。これからも第二言語として履修している中国語の勉強を中心に中国に積極的に興味を持って勉強し、そしてまた中国に戻って、より多くの発見と学びを得たいと思っている。また、中国だけでなくタイからの学生とも仲良くなることができた。授業内の発表や日常の会話を通してタイの食文化や交通を知り、タイにも是非行ってみたいと思った。

この START プログラムを通して、本当にたくさんの方と出会い、話をすることができ、たくさんのことを教えてもらった。この一生の「思い出」と友情を胸に、これからも交流、学びを続けていこうと思う。

(3) 今後 START プログラムに参加する後輩へのアドバイス

留学と聞くと少しハードルが高いように思われる方もいらっしゃると思います。語学の面や経済的な面、治安の面など不安要素はそれぞれだと思います。私は START プログラムを通して、語学のモチベーションが爆上がりしたのはもちろん、語学だけではない新たな魅力を感じました。それは自分が当たり前だと思っていたことが根底からひっくり返される衝撃です。机に座って学ぶ異文化理解には限界があるなと感じました。自分の目で見て、食べて、聞いて、話して感じる異文化は、笑ってしまうほど信じられないものもありながら、まるでフィクションのような世界での経験が自分の考え方に面白いトッピングを加えてくれました。先生方の手厚いサポートと確保された自由度の中で、安心して学ぶことができます。国境を超えることは意外と難しくないかもしれません。新しい学びに是非チャレンジしてみてください。

2024 年度前期 START プログラム 事後レポート

所属学部・学科・学年	文学部人文学科 3 年
------------	-------------

(1) START プログラムに参加して何を学んだか、この経験を今後どのように活かしていきたいか

START プログラムに参加して、インクルーシブな社会とその実現に必要なもの、そして異文化コミュニケーションに必要なものについて学んだ。

派遣先の長春大学、そして 6 日目に訪問した特殊教育学校では、学内の設備やカリキュラム、学生(生徒)と職員の間を含め、身体的に障害のある学生も、自らの能力を育て発揮できるような環境が十分に整えられていた。そしてなによりも、長春大学では学生が障害の有無にかかわらず皆同じキャンパスで大学生活を過ごしていることに感銘を受けた。長春大学では、同じ大学の中で、誰もが取り残されることなく活躍することのできるインクルーシブが実現されていると感じた。また、長春大学での講義を通して聴覚に障害のある学生の方々と交流を行った。工芸体験では学生の方々に協力してもらいながら作品を完成させることができ、最後にプログラム内で習った手話で感謝の気持ちを伝えることができたときは本当に嬉しかった。これらの体験を通して、インクルーシブな社会が実現され、その中で活躍している人々の姿を実際に自身の目で見て感じられたこと、そしてその実現のためには、一人一人の能力、将来に寄り添った教育や支援が欠かせないのだと気づいたことが大きな学びである。また、プログラム中は数々の交流を通して英語、中国語、日本語、タイ語、そして手話と、互いの言語を学び合った。このことは、互いの文化を知り学ぶきっかけを与えてくれたと感じる。私のつたない中国語やタイ語、手話でも相手がそれを受け取り笑顔になってくれたとき、流暢に話すことができなくとも、相手の言葉や文化を尊重すること、なによりその人自身を知りたいと思う気持ちが異文化コミュニケーションには大切なのだと学んだ。

私はこのプログラムで目にしたインクルーシブな社会を自分の暮らす社会にも広めていきたいと強く感じた。私は現在 3 年生であり、卒業後の進路にむけて本格的に動き出している時期である。この経験をもとに、インクルーシブな社会の実現に少しでも貢献できるように、地元での公務員職の就職を目指したいと考えている。この面で、3 年生の夏にこのプログラムに参加できたことはとても幸運だったと感じている。そして今後すぐに実践したいこととして、日本で暮らす外国人の方ともよりよいコミュニケーションをとることができるようにしたい。身近なところではアルバイトである。私のアルバイト先には外国から日本に来て暮らしているのであろうお客様も多く来られる。このプログラムで学んだ異文化コミュニケーションのことを生かし、そして、インクルーシブな社会の実現にほんの少しでも近づけるような接客を心がけたい。

(2) プログラム内容についての全体的な感想

このプログラムに参加したことは本当に素晴らしい経験になったと感じる。これまで一度も海外渡航経験が無かったが、大学の提供するこのようなプログラムがあることで、安心して渡航することができた。なによりも、提携先の長春大学での講義や体験学習、各見学先での学び、そして長春大学の学生や他の参加者との交流はかけがえのない経験となった。中国国内でも進んだ特殊教育を提供する長春大学で講義を受けインクルージョンを学ぶことができたのは、今後生きる、他に無い経験だと思う。また先述したが、プログラム中は長春大学の学生の皆さんや他大学からの学生の皆さんに大変お世話になった。中国語や中国文化を教わったり、逆にこちらが日本語を教えたり、タイ語を教わったり、手話を教わってコミュニケーションをとったりと、お互いの言語を学び合い、互いを尊重し合える友人になれた。これまで私はこのような異文化コミュニケーションの機会を対面で、長期間持つことはなかったため、本当に宝物のような経験になった。相手が自分の言語や文化を知ろうとしてくれることは、自分のことを知ろうとしてくれることであり、それをとてもうれしく感じた。これが異文化コミュニケーションに大切なことなのだと思う。また、一、二年生時より第二外国語として中国語を学び、かねてより中国へ興味があったが、今回実際に自分の肌で中国の街を感じることは貴重な経験だった。文化の違いも体験し、また渡航以前に持っていた中国への見方の変化もあった。これらは自分の受けてきた文化や自分の考え方、価値観を改めるきっかけになった。

(3) 今後 START プログラムに参加する後輩へのアドバイス

プログラム内の講義や体験は日本では経験できない貴重なものだった。そしてそれと同じくらいかけがえのない経験になったのは、現地の人々や他大学からの参加者との交流である。言葉がわからなくても、積極的にコミュニケーションをとり、その国の言葉を1単語から覚えて使ってみると良いと思う。上手に話すことができなくても、伝えようとする姿勢が相手に伝わると、コミュニケーションは成立すると感じた。